

素顔 '88

(3)



関 将 Brian Hoskins

今回は、英国を一方で代表する Brian Hoskins 教授を、Reading 大学に訪ねてみました。

問：まず、あなたの経歴を聞かせて下さい。

——Cambridge University の数学科に、1963 年に入学しました。まず最初に、純粋数学か応用数学かを決める時があり、応用数学と決め、マスターコースの段階で、F. Bretherton に会い、GFD を習って、それから、気象学を始めることになりました。そこで、フロントの形成について研究することになりました。当時、英国気象局の Bushby Thompson のモデルでこれが問題となっており、最初はモデルの結果を眺めていたりしました。博士課程の 2 年目に、Bretherton が、J. Hopkins 大学 (米国) に移ることになり、彼が、「一緒に来たかったら来てほしい」と云うものですから、3 年目には、米国へ移りました。しかし、学位論文は、Cambridge へ提出しました。

1970-71 年と NCAR で、post-doctoral をやり、そこでも、front genesis の研究を続けました。そして、1971 年に、Reading 大学に、Pearce 教授の提唱の下に、UK University Atmospheric Modelling Group が結成され、それに参加しました。まず最初に、Tony Hollingsworth, A. Simmons などが来ました。

その後、1972-73 年に、1 年間 GFDL に行きました。その時、カナダの MacGil 大学の主催の Stanstead Seminar というものがあり、始めて、spectral method のことを知りました。そこで、W. Bourke に手紙を書いて、彼の一層の shallow water model を送ってもらい

ました。それを、書き変えたりしていたのですが、大変助けになりました。GFDL では、多層のスペクトルモデルの開発や、semi-geostrophic model の開発をしていました。そのうちに、ECMWF が出来ることになり、T. Hollingsworth, A. Simmons が移ることになりました。

問：何故、ECMWF に移らなかったのですか？

——むづかしい質問です。米国に残るか残らないかという問題と、このことは大きな問題でした。しかし、自分は、やはり、free-agent でいたいと思います。ECMWF は、明確な役割を持っています。私は、好きなように大気を理解するという自由度を持ちたいと思っています。

問：何故、気象学を選んだのですか？

——数学を用いて、対象としているものを、具体的に见ることが出来ます。また、現象を理解することが、社会の役に立つことにもなります。米国の応用数学は、微分方程式を数学的に扱ったりするのが伝統ですが、Cambridge の応用数学の伝統は、自然にそれを応用するというものです。Butchelor とか、G.I. Taylor などが、Cambridge には居りました。

問：Cambridge の伝統が、気象学に向かわせたわけですね。

——そうです。ケンブリッジの伝統の影響は、非常に大きなものです。

問：今までの仕事のなかで、どれを誇りに思っていますか？

——どれと云うのもむづかしいですが、「フロントの形成」は、自分が始めたので愛着があります。Karoly と一緒にやったロスビー波の伝播の仕事もそうです。ω-方程式の様なものも愛着があります。

問：今、どんなことに興味がありますか？

——雲のスケール以上のすべての気象学に興味があります。最近では、各人が専門化して来て、数多くの論文が書かれますが、ほとんどすぐ本だなへ直行です。幅広い領域で、幅広い興味を持ちつづけてゆきたいと思います。

問：今後、どんな分野を研究していかなければならないと思いますか？

——Practical には、一日以下の時間スケールと、1 月程度の時間スケールの現象でしょう。学問的には、1 か月を理解せずして、一年を理解することは不可能であると思います。

問：気候問題、例えば、大気-海洋結合系などはどうですか？

——10年先をみれば、非常に重要になるでしょう。El-Nino は、非常に大きな信号ですし、CO₂ にとっても、海洋は重要です。しかし、私たちのところは、当面は、大気だけでやってゆきたいと思います。我々は、大気ですら、完全に理解していないのですから。我々の仕事で、「熱帯が完全に中緯度を支配している」という人が居ますが、それは、全く誤りで、中緯度には、解明されていない様々な現象があります。

問：若い人達に云いたい事はありますか？
——学生が、博士課程に進学するか否かを相談する時に、いつもいう言葉をのせましょう。もし、お金を稼ぎたいのなら、今すぐ別の所へゆきなさい。科学の楽しみは、一生懸命頑張って、ある idea を得、それをまとめ、何かを発見し、それが、何らかの意味で社会に還元されていくことにあります。このようなことで、報われているというわけです。

問：日本の気象学についてはどう思っていますか？
——私がアメリカにいた時に、何とおおくの、数値モデルの先達が、日本人であることに驚きました。もう一つは Matsuno を代表とする理論グループの活動で、非常に強く、印象づけられました。
問：最後に、日本の会員の人人に一言？
——I look forward to see you.!

前に会議で会った時は、精やかな顔付きで、近より難い人物かなあ、と思っていたら割と気さくな人でした。新しい再評価プログラムが進行中の今、新興レディング大学に抛り、既成の権威たる Oxford, Cambridge に抗して、頑張っているところはあっぱれ好漢 Hoskins という感じです。5時になると、ヘルメットをかぶって、bike で家に飛んで帰ってゆく姿が印象的でした。
(住 明正)

日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所	備 考
Scale Modeling 国際シンポジウム	1988年7月18日 ～22日		東京	Vol. 34, No. 6
国際シンポジウム第3回 流れのモデル精度向上化	昭和63年7月26日 ～28日	同組織委員会, 他	日本都市センター	
第27回 COSPAR 総会	1988年7月18日 ～29日	宇宙空間研究委員会 (COSPAR)	フィンランド, ヘルシンキおよびエスプー	
国際オゾン・シンポジウム	1988年8月8日 ～13日	IAMAP オゾン委員会	西ドイツ, ゲッティンゲン (ゲッティンゲン大学)	Vol. 34, No. 1
Postgraduate Summer School on Microwave Remote Sensing for Oceanographic and Marine Weather-Forecast Models	1988年8月14日 ～9月3日	EARSeL	イギリス・スコットランド Dundee 大学	
国際放射シンポジウム	1988年8月18日 ～24日	IAMAP 放射委員会	フランス, リール	Vol. 34, No. 1
第6回エアロゾル科学・技術研究討論会	昭和63年8月23日 ～25日	エアロゾル研究協議会	大阪市立労働会館	Vol. 35, No. 2
数値モデルの系統的誤差に関するワークショップ	1988年9月19日 ～23日	WMO	カナダ・トロント	
The 2nd International conference on Atmospheric sciences and Applications to Air Quality	1988年10月3日 ～7日	同国際組織委員会 国内組織委員会	日本学術会議	Vol. 34, No. 9
日本気象学会 昭和63年度秋季大会	昭和63年10月26日 ～28日	日本気象学会	宮城県民会館	Vol. 35, No. 5
第26回粉体に関する討論会	昭和63年10月27日 ～29日	同討論会	石川県社会福祉会館	Vol. 35, No. 4
大型レーダー国際学校	昭和63年11月24日 ～28日	京都大学超高層電波研究センター	京都市・烏丸京都ホテル	Vol. 35, No. 4
第10回風工学シンポジウム	昭和63年12月1日 ～2日	同運営委員会	東京・中央大学理工学部	Vol. 35, No. 4